『救済周阿心敬百番連歌合』をめぐって

奥野純一

はじめに

心敬の晩年は、急速に兵乱に傾斜してゆく京都を出立して伊勢神宮参詣を果した旅が、そのまま品川逗留から関東各地の流浪に変転してゆき、遂に故郷に帰ることも得ぬままに大山山麓の庵室に終えられる、というものであった。この流転の境涯を、何らかの特別の政治目的のもとに企てられた行動の結果であると考えることは、心敬像を一まわり大きな人物として把握する、興味深い見解である。ただ、わずかに今日まで残された作品は、その流浪の発端がその後の生活の激変を予測するものではなかった、という事情を伝えるにとどまっているといえよう。

心敬は、関東各地を転々とする数年間の生活のなかで、発句を作り、和歌を詠み、連歌を独吟し、随筆の筆を執るという、とりわけ連歌と分かちがたい時間を持って生涯を閉じたのである。それはたしかに、ひたすらな文芸の求道者としての心敬像を示すものであった。しかしながらその姿を認めるということは、とりもなおさず心敬がそのような生活のなかでどのような意味で求道者であり得たのか、について答えることを求められる。心敬の残した作品はまた、連歌に一座し、歌合の判者を勤めるなどの、この地の文芸愛好者との交遊や、句を合わせ、作句に自注を施し、書状を認めるといった、個々の好士との交渉のなかで生み出されたものであったからである。

その意味で、心敬の作品のなかでも『救済周阿心敬百番連歌合』[注一]（連歌合、合）、『連歌百句付』（百句付、付）、

『連歌百句付自注』（自注、注）の一連の作品群は、特に注目される。この三作品は、救済と周阿の百番の連歌合に心敬が付句を試みた連歌合、その前句に自句のみを対した付合集、さらにそれに自注を付した句評ともいうべきものの、三形態をとっている。それぞれに付された跋文に、前二者が応仁二年（一四六八）六月二十五日と九月二十五日の成立と知られ、第三の作品はそれらを受けて編まれたことは、間違いなかろう。同一付句が三形態をとる、これら一連の作品が特に注目されてきたのは、それぞれの作品において、次々と句形の修訂が重ねられていて、それらが晩年の心敬の表現志向、ひいてはその文芸観を窺わせるもの、と認められるからであった。

このような問題意識から、すでにこれらの各作品の前句および心敬付句について、詳細な分析が加えられているが、[注二]その重要性からして、なお表現分析が総合的に進められるとともに、救済・周阿句との対比、跋文の考察、自注の検討などが、多面的に試みられる必要があると思われる。特に『連歌合』においては、心敬句と他二者の作との表現型および付様の比較、『百句付』にあっては、修正句の表現型の変化および特徴の検討、『自注』においては、自注の内容および表現型との関係把握、などが有効であろう。それらの検討が、各作品に付された跋文の考察と相俟って総合的に把握されるとき、始めて心敬のこれら諸作品における表現志向とともに、関東の地にあっての心敬の連歌享受に対する姿勢の一端までを、明らかにすることになるといえよう。

以上のように三作品の検討課題を考えるとき、検討のための有力な関連作品として、『心敬有伯へ返事』[注三]が注目される。この書簡は、心敬の連歌合以前の時点での救済と周阿の百番連歌合への関心、両者の作風の理解、例句紹介の態度、教示相手への姿勢などを詳細に示していて、三作品の検討に際しての有益な観点を提供するからである。また、『連歌合』『自注』とちょうど相前後する、応仁二年四月晦日と八月晦日に著された随筆『ひとりごと』[注四]も、無視出来ないことはいうまでもない。この作品は、心敬の連歌史観、救済・周阿の評価、前句への見解、予想読者への態度などが作品の要素として生かされていて、前記の二作品、特に『連歌合』跋文と対比して、顕著な相違点を内在させているからである。

本稿はまず、『心敬有伯へ返事』から三作品の検討のための観点を抽出する。次いで『連歌合』の各句に具体

的な分析を試み、その特質を把握する。さらに跋文に考察を加えて、連歌享受者に対する心敬の態度を検討する。最後に『ひとりごと』における『連歌合』との相違点を指摘する。このような一連の検討結果を総合するところに、関東の地を流浪して生涯を閉じた心敬像の、輪郭ともいうべきものを浮かび上がらせることが出来ればと考える。

一、『心敬有伯へ返事』の諸問題

(一)　『心敬有伯へ返事』の性格と成立事情

『連歌合』に始まる三作品の検討の観点を得るために『心敬有伯へ返事』を採り上げるとき、前提としてこの作品の性格を理解し、また救済・周阿の百番連歌合との、心敬の出合いの経緯を明確にしておくことが必要であろう。

まず、『心敬有伯へ返事』は、個人に宛てられた書簡の形態を持つものであることが注意される。この事実は、心敬の作品に窺える微妙な公私の区別意識から考えると、明らかにこの作品の私的な性格を意味した。心敬において私的作品と意識されたものには、独吟、独詠のほか、私人に与えられた種々の作品があるが、拡大して考えれば、随筆についても、その初稿は私的な性格と意識されたかと思われる。それら諸作品に対して、公的な作品を意味するものとしては、複数の人物と同席する連歌や歌会、あるいは地位ある人物に呈された作品類があげられ、それらの延長線上には、再写して与えられた随筆までが位置していると考えてよかろう。心敬におけるこのような公私の意識は、作品の形態それ自体によるものや、署名の有無や序文、跋文、奥書などにおいて表明される場合とともに、その作品の話主の相手への語りかけの姿勢のなかに示唆されていることも少なくない。

次に心敬が救済と周阿の連歌合を見たのは、『連歌合』以前であることはもちろん、あるいは京都在住時代ではないかと推測されることを指摘したい。書簡の紹介者である島津忠夫氏は、「恐らくは、有伯から、その連歌合を見せて貰ひ、これはその返事であらうと思はれる」[注五]と、書簡を介して、心敬・有伯と連歌合の関係を推定されたが、その説明からは、心敬がこの救済・周阿の作品を披見したのは、自らも付句を試みた応仁二年とさして

遠くない時点であると想定されていると解される。

島津氏の解説を受けて斉藤義光氏は、この返事が応仁二年六月二十五日の署名を持つ『連歌合』成立以前に認められたものと思われると同意を示されるものの、寛正二年（一四六一）正月二十五日に心敬と有伯との同座の事実があることを追加考証されたうえで、心敬は「応仁二年を遡る約八、九年の間に有伯から「救済・周阿百番連歌合」を借覧したであろう可能性が推定される」[注六]と、時間的に明確な幅のある見解を示された。この推定は、心敬が連歌合を披見したのが、まだ京都在住の時点であり得るという判断を主張されるもののようにも受け取られる。事実、書簡の冒頭部分の記述を素直に解釈するならば、むしろそのような事情を想定した方が妥当ではないかと思われる。また書簡の相手有伯は、相当の力量の連歌愛好者であると推定出来ることも重要であるが、それとともに救済・周阿句の引用状況から見て、心敬と有伯はこの連歌合を話題として共有しつつも、有伯は未見であったという場合も否定出来ないように感じられるのである。

(二)　『心敬有伯へ返事』における『連歌合』への関心と連歌史理解

以上のような限定や推定を前提として『心敬有伯へ返事』の検討に入ると、第一に問題となるのは、救済と周阿の百番連歌合を初めて知った心敬が、この作品にどのような関心を抱いたかという問題である。この点について考えると、書簡を有伯へ送った時点では、心敬の関心は、連歌史の展開とその根底に流れる創作態度の変容の問題に、より多く傾いていたといい得るであろう。それらの内容は次に検討するが、心敬はこれらの問題意識との関連において、救済と周阿に注意を向けたのである。

心敬は両者を対比的に批評し、救済については、位高く、心が大様で及び難く、稀有のものであると思われるとし、句については、毎句艶深く貴重な作であるとも、心を詞にゆずり、詞を心に残し、大様で情感深く見え、位の至らぬ眼には及び難い風体であるともする。それに対して周阿の作風は、荒々しく、凡俗めいたものに近いが、これも卓越した技巧の持主であるとし、救済に比して仏道修行が不足で、感情の深さに欠けると断じ、句についても、詞・心に少し凡俗が残り、面影・艶に欠けるとしているのである。

以上、書簡の内容から注意されるのは、心敬が自らの主張を裏付けるための好例となる、救済・周阿の作品をあわせ示すものとして、この連歌合に注目した事実である。後に心敬は『連歌合』の跋文に、「此前句にて、救済・周阿、句を合侍りて、二条大閤御墨を申給へる、頗金玉なり。一見感情に堪かねて、瓦礫を付侍り」と、感激とともに付句するという姿勢を披露しているが、在京当時の心敬は、その心境になかったのである。この一連の事実は、心敬の『連歌合』の創作動機が、関東下向という境遇の変化との関連において探求される必要を示唆すると考えられよう。

第二に問題となるのは、心敬がこの書簡において、連歌史の展開と創作態度の変容を、どのように理解していたのかという問題である。これらの点について書簡をまとめると、心敬は連歌史の展開について、上古はいまだ完成に至らず、輪廻や付節の注意など細かな問題意識はなく、連歌の隆盛に伴って、諸点にわたる穏当な理解が成立してきたと捉える。しかしながら、上古の作者の意と近代好士の風体には大差が認められ、当時の二流作者でも深い感動を表現し得ているが、近頃の堪能は単に上手であるだけで、心が世俗の邪見に落ちているとする。さきに紹介した救済・周阿の作風の比較は、連歌史の展開における上古連歌の長所と近代連歌の欠点の問題意識に係り、特に周阿については、後者の問題点との関連において捉えられていると見られるのである。

以上の個所から指摘出来るのは、有伯へ返事を認めた時点で心敬は、救済と周阿の百番連歌合をも踏まえて、近代から近頃の連歌享受の状況に厳しい批判を加え、また救済・周阿に対しても、この観点に立った個別的な理解と評価を示している事実である。ところが関東下向後に創作された三作品の跋文[注七]においては、救済・周阿を並べて賞讃し、両者の作風と創作主体の問題に個別的に言及することはないのである。この事実のみをとっても、心敬の『連歌合』の創作意図が、対象となる関東の連歌愛好者の状況との関係から考察されることを要請しているといえよう。

㈢　『心敬有伯へ返事』における救済・周阿句の引用

さて、第三に問題となるのは、心敬が救済・周阿の句を引用するに際して、前句を含めてどのような改変を行

なっているかという問題である。心敬は有伯への書簡に救済と周阿の百番連歌合から、両者の付句を五句ずつ引用したが、その句形は連歌合本文と十箇所にわたる異同を示している。それらは、問題の多いこの書簡の本文上の乱れとも見られるものの、その異同を検討することによって、心敬による句形改変ではないかと想定されるのである。その詳細は、救済・周阿ともに前句・付句の句形に異同ないもの一、前句に改変あるもの一、付句に改変あるもの二となる。奇妙な一致というべきであるが、恐らくは心敬が句形改変を試みながら書簡を認めたなかで生じた、偶然の結果であろう。

では、書簡における句形の異同は、どのような内容を持つものであろうか。異同が存在する例句について『連歌合』本文と対校し、相手句および心敬句をも併わせて括弧内に示したうえで、検討することにする。

まず救済句について検討すると、

30　露の寒きは霜にかハりて
（〳〵野にハある草や山にも枯ぬらん　周）
　庵古ぬこの後たれかむすばまし　侍
（秋の花さそふ冬野をいたむらん　心）

の場合、救済句が前句の「霜」に対して「古ぬ」、「露」に対して「結ばまし」と応じるという、結構の句の傾きを持つことを避けるために、後者を「住ばすめ」と改変したと考えてよい。

80　近く見へたる杉のむら立
　雪に吹閼の嵐によハ明て　侍
（霧はるゝ山田の原に月出て　周）
（朝まだき山本青き雨晴て　心）

の場合、「雪に吹」は「吹く」の読みが原形とすれば、「吹き」とすることによって句に曲折を与え、時間の推移を印象せしめる効果、ひいては句に精緻さを与える改変であると解し得るであろう。

84　塩干の川やなかれ出らん

（海士人の水汲舟をさしよせて　　周）
明暁仄は所〳〵に山ミえて　　侍
（朝朗霞に雪の江は晴て　　心）

の場合は、「明仄」が「暁」に改変されていることで、時間をさらに引き上げ四囲の闇を強調し、もって自然の力強い運行の印象を表現し、位の高さの感覚を与えようとするものと読みたい。前句が「添いづるらん」と改変されているとすれば、付句の改変をこのように解する妥当性は増すであろう。原形の「ながれ出らん」と「明仄」の付合では、付句があまりにも前句を合理的に受け止めるものに堕してしまう。

92　夢より覚ればの後に夜こそ明ぬれ
（鳥も鳴鐘も声して又もねず　　周）
きのふぞと思ふ別も昔にて　　侍
（送り捨帰る野もせに鐘なりて　　心）

の場合、夢は夜明けによって中断されるものだという考え方からすれば、原形の前句が難句であることは、『自注』に「前句殊外難儀におぼえ侍る歟」と述べている通りである。それに対する救済句は理屈が勝っていることは明らかで、改変によって付句との関係はきわめて自然なものとなり、大様ななかにそこはかとない情感の籠った付合となることが分かる。

このように見るとき、心敬の句形変更は、まさにさきに紹介した心敬の救済評価に、より近づける意図からなされていることが判然とするのである。では、周阿句の句形改変は、どのように判断出来るであろうか。

2　身のはるたのめ神ならば神
（此道辺の　あらハるゝ雪分て　　侍）
〳〵苗代の水にの雨まつ哥よミて　　周
（世にかすむ名をバ昔も歎くらん　　心）

この場合、『金葉集』の「なはしろみづにせきくだせ」などの例歌からすれば、「に」の方が妥当であり、助詞

の用法としても素直な句作りである。改変句は、意味も理屈に走るものとなり、語調の上でも佶屈感を与えることは一読して明らかであるから、心敬の改変は、一句の大様さを失なわしめるところがあるといえよう。

6　かゝる折しも月おぼろなり（氷の上も）
（船とむる浦より川のさゆるよに　侍）
大原や山の中なる清水にて　周
（袖寒ミ暁起のはるの水　心）

の場合は、付句は助詞の改変であるが、「や」を「の」とすることは『後拾遺集』の本歌からもはずれ、また抒情味を大きく削ぐものであることは自明であろう。また、前句の改変は、その独立性を強めていたが、一方で付句により密接させる改変とも理解され、それが結構句への傾向を強めるとも解釈出来るであろう。この改変は『百句付』『自注』にも引き継がれ、後者では「前句よるべき所なく候か（中略）。かやうの前句をめづらしきかたへひきなして侍る事、初心のことにては不庶幾歟」とするが、周阿評の例句として本句が引用されていることを考え合わせて、注意を惹くところである。

53　山より出る道ぞ見えたる
初雪に跡をおもはぬ木樵にて（おしまぬ）　周
（のがれなバ世にかへらじと思ひしに　侍）
（一すぢの水は雪にも顕れて　心）

の場合、「おもはぬ」から「おしまぬ」への語の水準での変更であるが、意味的により直接的表現に堕し、書簡に周阿を評していう、「詞心少し凡俗のこりて面影艶なく候」の批判に一層傾く表現となっている。

74　生れあひてもともに老ぬる（ぞ）（た）
（〻黄鳥の此頃鳴に花落て　侍）
〻鳥の子の尾羽とゝのへバ巣を出て　周
（鳥の子のすだつばかりの春の草　心）

の場合、前句の助詞「も」から「ぞ」への改変は、静嘉堂文庫本『百句付』に見えるところであるが、「老ぬる」の「老たる」への改変は、この書簡に独自のものである。「ぞ」の方が、句意が明瞭になるとしての改変であろうが、「鳥の子」へよく付く句形に改変したとも理解出来る。また「老(おい)たる」としては「尾羽とゝのふ」との関係を強く意識させ、わずらわしさを覚えるものとなる。改変はともに、付味を細かく緊密な関係に変化させていて、前引の周阿評を強化するものと解される。このように見るとき、心敬の句形改変は、周阿句の否定的側面をより強調する方向になされていることが、強く印象づけられるのである。

(四)　『連歌合』の救済・周阿句と心敬句

心敬が有伯への書簡に引用した救済と周阿の百番連歌合の句型の異同は、心敬の連歌史観および救済・周阿の作風理解に添ってなされた意図的改変であった、と想定された。この点と関連して、『連歌合』の心敬句と書簡の救済・周阿句の題材との相互関係が、興味を惹くものとなっている。三者がそれぞれ共通ないし別途の題材を採る場合を別として、心敬句が救済句のみと類似の題材を採る例は認められず、周阿句と親近関係を窺わせる例は、30・92・53・74の先引句のほか、

12　夏木立とや青葉なるらん
（ミづ垣の加茂の社を祭る日に　侍）

春の後ミ山がくれの遅ざくら　周
秋ならぬ露にも花は移ろひて　心

を加えて、八句に及ぶことが分かるのである。

さらに表現手法の特徴を把握するために、表現型について三者の関係を分析すると、そこにも一応の傾向が示されているように思われる。三者が表現型で基本的に一致すると認められるのは、先引の53および、

62　深山の道をひとりこそゆけ
へくもる日は我かげだにもミにそハで　侍

〈花もなきその木末だに夕にて　　周
　ミしハなき蓬が杣の露分て　　心

の説明型を基本とする二例があるが、一致は完全ではなく、ともに救済・周阿一致句に分類出来る。80・84の場合も、厳密には2・6・74の例とともに両者のみの一致句と見ると、それらは合計六例を数えることになる。これに対して、救済と心敬の基本的一致句は92・12の二例、周阿とのそれは30の一例があるが、完全な一致例は12の場合のみと判断される。このように見るとき、心敬が多少とも救済・周阿と異なる表現型を採る場合は、九例の多きにのぼることになる。

以上のような、書簡における救済・周阿の引用句の改変とそれに関連する諸事実から、特に注意されるのは、心敬が救済・周阿それぞれの句風の差異を認識したうえで、表現改変を行なっていることである。また、心敬は良基の判断にこだわることなく、独自の基準によって句を評価し、救済よりも周阿の題材により多く依拠しながら、両者のいずれとも異なった表現型を志向して付句したことが想定されるわけである。これらの諸点は、心敬が連歌史観や表現理念について独自の見解を持ち、それを書簡においても詳述している事実や、表現手法における上古と近代の変化、また現在の連歌享受の問題について、書簡において強調している事実と考え合わせる必要があろう。

そこから、心敬は自らの理論を実作と密接した関係において考える作者であって、また、自らも近代作者であるというその立場を意識しているという事情が確認出来るであろう。これらの事実は、関東下向後の一連の作品における前句および自句の修訂が、当然のことながら心敬独自の連歌史観や現代の表現理念のもとに進められているであろう事情を想定させるといえよう。また『連歌合』の試みにおいて、心敬が救済・周阿の両句をどのように意識して付句しているかという問題の検討が、重要であることを示唆することはいうまでもない。

(五)　『心敬有伯へ返事』における心敬の教示態度

さて最後に問題となるのは、心敬が自己の見解を教示するのに、どのような態度を取っているのかという問題

である。心敬は救済と周阿の百番連歌合に言及するに先立って、心敬一流の連歌論を展開する。すなわち、まず近時の歌道の状況を批判し、稽古と工夫・修行という句作上の課題を示す。次いで幽玄体の特質を論じ、結構の句と具足による付合を中心とした、下手の句の特徴を説明する。さらに他人の句を明らめ知ることの困難さから、工夫・修行なき人の句の評価の観点を提起し、不数寄の耳なき人と耳の少しある作者との評価態度をあげ、一体尊重の態度を否定する。それとともに堪能の句作の特質の指摘から、結構の句と大どかな句の欠点にふれ、冷暖自知の問題と結論する。そして最後に、知恵・利根の限界を示し、真の心を知るための工夫・修行・執心を強調し、念々修行の必要を説き、一貫の人として救済・宗砌・智蘊をあげるのである。

これらの委曲を尽した教示は、心敬との一座に対する有伯からの礼状に接して、十分な指導も行なえぬままに慌しく席を辞した詫言をふまえてなされたものと想定出来る。そこで特に注意されることは、心敬の語調から見て、その教示が相手の有伯と状況認識を共有するか、少なくとも同一にし得るという立場においてなされていることである。またその教示は、相手有伯が心敬の主張する創作態度を理解し、受容することの出来る存在と認めたうえでなされていると判断されることである。

心敬の状況理解は、当座の翫びのみで稽古・工夫・修行の欠除すること、名聞や世俗のための手段化、上手ばかりで賢出のみ心がける態度という、現実に対する激しい批判にあった。また、心敬の主張する創作態度は、環境や交遊の選択、他者への理解、創作主体の精神面の重視、表現手法の精神面との関係化、工夫・修行の要請といった、創作主体への厳しい要求をその内容とするものであった。これらの諸点は『連歌合』の跋文に全く言及されない事実と考え合わせると、在京中の心敬の相手への態度と、関東流浪中の連歌愛好者への対応との比較がきわめて重要であることを明らかにするであろう。

『心敬有伯へ返事』の検討から判明した諸事実は、このように『連歌合』以下の諸作品を検討するための、最も中心的な観点となるものであった。それとともにそれらの事実は、心敬の関東流浪中に生み出された一連の作品の創作意図や連歌享受者観を通して、心敬像を明らかにすることの困難さを、あらためて確認させるものであった。

二、『救済周阿心敬百番連歌合』に見る心敬像

㈠　『連歌合』跋文の伝えるもの

心敬は関東流浪のうちに、救済と周阿の百番連歌合を再見して、一連の作品を残した。その最初のものである『連歌合』は、どのような心敬像を伝えるであろうか。以下に、跋文および付句の両面からの検討によって、この問題に迫ってみたい。

まず『連歌合』の跋文の検討を試みるが、それはほぼ次の諸点を内容としている。

第一に、救済・周阿の連歌合を「頗金玉なり」と評価し、第二に、「一見感情に堪かねて、瓦礫を付侍り」と創作の心情を披歴し、第三には、「田舎の徒然の心を養ひ、又いさゝかの稽古にもと思ひ侍るばかり也」と、創作の目的を述べる。次に、第四に、「両賢、既前句の心詞の髄脳をバ、毎句取尽し給侍れば」と、両者による付句の完全さを指摘し、第五に、上古の風躰であることで、「大様大どかにして、ありがたく」思われるとする。しかしながら第六に、時代が遙かに過ぎているので、そのままでは「今の代の耳にハ、事ふりたるなるべし」と判断し、第七に、時代の移り変わりによる「風躰の用捨、簡要たるべく候哉」と主張する。そして第八に、前句について、「品なくえむにおくれ、ことゞ〳〵しく心つたなく、難句ども」であると非難することをもって終えられている。

このような跋文の諸点を、書簡によって提起された観点から考察すると、第一に指摘されるのは、心敬がこの作品を付嘱した相手に対して、書簡の有伯のように創作主体としての共通意識を示していないことから、主体への要請もなされていないという事実である。この事実は、心敬がその相手という連歌享受にとって基本的な存在について、有伯に対するのとは異なった評価と態度を抱いていたことを意味するのではなかったか。心敬の付句の営為は、問題意識をともに語り得ない相手への対応を前提としてなされている一面があると想定されることは、『連歌合』における心敬像を考えるうえで重要であろう。

第二に指摘されるのは、救済と周阿の連歌合が再見のものであることにふれずに、かつては創作的関心を寄せ

ることがなかったその作品を、一見してただちに感激のあまり付句を行なったと表明し、またその創作は田舎における徒然の心を養い、稽古のためであったと説明する事実である。これらの事実は、心敬が救済・周阿の連歌合の所蔵者への配慮を必要とする立場にあった、という推測を容易にさせるものである。また、この作品に再会したとき、心敬は連歌享受の場に対する満たされぬ思い、あるいはそれを含めた生活の不如意さによって、閉塞した心境にあり、そのことが心敬の重視した稽古の不足を、一層強く意識させたことを想像させるのである。

第三に指摘されるのは、書簡では連歌史について、上代の句風を評価し、当世の好士を批判し、また、個別的に救済・周阿を認識し、周阿句風に難点を見出していたものが、救済・周阿をともに賞讃する反面、上古の風体が現代では適合しないことを強調し、前句へ激しい非難を加える事実である。この事実は、心敬の相手において救済・周阿を分別した批評を受け容れる余地が乏しく、またその連歌享受の雰囲気については、古様の欠点とほぼ同質の問題点が存在した事情を推測させるものではなかろうか。

以上、『連歌合』跋文の問題点を指摘したが、そこに認められる心敬像は、まことに屈折した内面を抱えた、流浪の老芸術家のそれにほかならないといえそうである。特に、関東流寓のなかでの創作的危機感が、先賢作品との再会を契機として、以前になかった創作意欲を燃え立たせるとともに、この地の連歌享受の水準の低さから見た作品評価の不可能さを自覚し、支持者の意向を配慮して連歌創作態度を間接的にしか批判しないところは、心敬像の基本的枠組を考えるうえで、重要な要素であるといえよう。

(二)　『連歌合』各句の表現型分類

関東流浪を生きる心敬像について、『連歌合』跋文の伝えるところは少なくなかったが、それをうけて、当時の心敬について最も多くを語るはずの、『連歌合』の付句そのものの検討に移りたい。

このために、特に心敬の付句表現を中心に一連の表現分析を行ない、また後に付様の検討を試みるが、前者としては、まず前提として前句と救済・周阿・心敬の各句の表現型を判定し、その結果をもとに心敬付句が他作者の付句と、どのような相互関係を持つか検討する。さらに、他作者の表現型と異なる心敬付句に限定して、それ

らの表現型の傾向を分析する。また付様の検討としては、心敬付句が他者のそれに対して、顕著な対照をなしている要素を求めて概括的な分類を行ない、心敬付句の付様の傾向を把握する。

まず、心敬の付句の表現分析の前提として、前句と救済・周阿・心敬の各付句の表現型を分類して表示すると、表Ⅰのようになる。

表Ⅰ

	主観描写型	客観描写型	説明型	表明型	抒情型
前句	33 13 46	0 20 20	2 10 12	1 2 3	11 6 17
救済	13 5 18	1 7 8	51 8 59	2 2 4	4 5 9
周阿	8 9 17	0 14 14	45 12 57	3 1 4	2 4 6
心敬	13 6 19	2 16 18	35 21 56	1 0 1	2 2 4

（注）各欄の数値は、上段　純粋型、中段　複合型、下段　合計の句数を示す。

表から前句について見ると、まず、

41　此夕ぐれも人ぞまたるゝ
（独聞荻の上風身に入て　周）
（わかれうき今朝の涙のそのまゝに　侍）
（いつはりにうたて命のこりもせで　心）

のごとき主観描写型が46句と半数に近く、うちで41の純粋型が33例と中心を占めることが注目される。これは同

型が、付句では各作者とも二割に満たないことから見て、前句の最大の特徴である。

次に客観描写型が20例を占めるが、こちらは全てが、

8　いにしへよりも霞むあり明
（〳〵花は猶老の名残や思ふらん　周）
（老が身に夢の残るもすくなくて　侍）
（花にさへそらめ悲しく身ハ老て　心）

のように複合型である。これは純粋な景気の句ではない体言終止句も、多くこの表現型に含めたことによっている。他句と比較すると、心敬句のみほぼ似た数値を示すことが注意される。

第三に抒情型が17例を数え、純粋型が、

37　やすく過るハ時雨なりけり
（〳〵月をミてふりぬと思ふ身の盛　周）
（われのミと世にふる事を歎く身に　侍）
（雲は先せとこす船に先立て　心）

と、6例にのぼることも分かる。付句では救済の場合が最多であるが、前句の半数にしか過ぎず、純粋型と複合型が相半している様相が認められる。

第四に、すでに引用した2の前句（七頁）のような表明型は、3例ときわめて少ないが、この傾向は付句にも認められ、連歌一般における同型の位置を示すものとも解されよう。

最後に、説明型は次に示す、

49　朝夕まつハ旅の音づれ
（山川をいく日の道に隔つらん　侍）
（遠く行人も月日や隔つらん　周）
（子をおもふはゝその一木枯やらで　心）

のように、客観描写型に区分した例に近い句などをも含めても、12例の少数を数えるのみであり、従って例句を含めて大多数が複合型をとっている。これは同型が付句では過半数を占める事実と合わせて、主観描写型ときわめて対照的であり、やはり前句の重要な特徴であるといえる。

次に、表を付句について見ると、まず主観描写型は付句の表現型の第二位を占めるが、三者ともに二割に満たない。そのうちでは、

23（心の月もはや更にけり　　）
〻独ねてこなたの秋を思ひしれ　　周）
行まゝに野中ハ山の陰もなし　　侍
あかでたれ昔がたりをかへすらん　　心

の例のように、救済・心敬に純粋型が多く、周阿は複合型とほぼ同数であることが特徴的である。

次に客観描写型は、三者において純粋型に乏しく、これも前句に共通する傾向である。三者のうちで救済が最も少なく、

37（杉の木のまの雪ぞミえける　　）
（〻二本の花にいづれかのこるらん　侍）
（〻月のもる関の清水ハ氷にて　　周）
明初る横川の遠の比良の山　　心

の例に見る心敬は逆に最も多く、前句とほぼ同様の傾向を示す。周阿の句数は、ちょうどその中間に位置するが、純粋型を欠いている。

第三に抒情型について見ると、客観描写型と逆の傾向が窺え、救済の句数が最も多いが前句の約半数に過ぎず、周阿・心敬と順次減少している。前句の場合、純粋型が多いが、付句では次の周阿句、

42（別し人のとをきおもかげ　　）
〻故郷ハ花をまちてやとハれまし　　周

（夕けぶり空なる雲に立添て　侍）
（隅田川舟まつくれに袖ぬれて　心）

のように、複合型がやや優位である。

第四に表明型は、例句の救済と周阿に4例と、ほぼ前句に等しく、心敬は1例のみと少ない。

50（つなぐとミえて船ぞとゞまる　）
我ハ旅すまの関守心せよ　侍
（旅人の馬うちわたす川のせに　周）
（汐せにハゆるぐばかりの浪もなし　心）

付句では、純粋型がやや多いことが指摘出来る。

最後に説明型はそれぞれ過半数にのぼり、前句の傾向と顕著な対比を示している。救済・周阿・心敬と順次句数が減少するが、その差は小さい。また、純粋型と複合型とを対比すると、次の救済・周阿両句、

18（誰すむ里も秋やうからん　）
荻に吹風ハひとりが暮ならで　侍
へあひにあふ月と風とのよさむにて　周
（草がくれのこす思ひの露もなし　心）

のように前者が圧倒的に多いが、後者は句数とは逆に心敬・周阿・救済の順で多数を占める。

総じて付句にあっては、主観描写型、客観描写型、説明型の三表現型において、救済・周阿・心敬の二者の差異が窺い得るが、特に客観描写型は心敬に多く、抒情型をも含めて説明型では救済が多く、周阿は全ての点で中間的である傾向は注意してよい。また、五種の表現型を通じて純粋型と複合型の比重を見ると、救済は純粋型が多く、周阿・心敬に複合型が相対的に多いことも指摘出来る。これらの諸点の分析に知られる心敬付句の表現傾向は、心敬が付句するに際して、救済・周阿両者の表現型を、相当に意識しているであろうという推測を、かなり整理された形で裏付けるものと思われるのである。

㈢　心敬句と他作者句の相互関係

次いで心敬付句が他作者の付句の表現型と、どのような相互関係を持つかの検討に移るが、分類を表示すると表Ⅱのようになる。

表Ⅱ

	該当句番号	計
三者一致	16 22 34 57 69 76 79 89	8
救済心敬	12 23 29 33 43 55 60 75 90	9
周阿心敬	1 4 7 10 14 26 40 70 82 91 93	11
心敬独自	2 《3》 5 6 《8》 9 《11》 13 15 17 18 《19》 20 21 24 25 27 28 (30) 《31》 32 《35》 (36) 37 38 《39》 《41》 《42》 44 (45) 《46》 47 (48) 49 50 《51》 52 《53》 54 56 58 《59》 61 《62》 《63》 64 65 66 67 68 71 《72》 《73》 74 77 78 80 (81) 《83》 84 《85》 86 87 88 《92》 (94) 95 96 (97) 98	70

（注）心敬独自表現句の（　）は、心敬句が純粋型でその表現型を基本型とする他句があるもの、《　》は、心敬句が複合型でその基本型の純粋型の他句があるものを示す。

表から、救済・周阿・心敬の表現型が一致する付合は、

57（ミなとも浦も船ハゆくなり　　）

へ松にふき波に声ある風聞て　　侍

あま人のむら〳〵に住里有て　周
後れじと旅人さハぐよハ明て　心

の説明型の例など8例、救済と心敬が一致する付合は、

90（はかなくミゆる浦の釣ぶね　）
〵後の世にしづミはつべき身をしらで侍
（〵あま人は後の世ありとよもしらじ　周）
風波の此世にしばし身をうけて　心

の説明型の例など9例、周阿と心敬が一致する付合は、

7（月朧なる旅のあかつき　）
〵故郷に我待花や咲ぬらん　周
（山遠き雪より鐘のひゞき来て　侍）
船遠き鐘霞む江ハ花もなし　心

の主観描写型など11例であることが分かる。これは、それぞれ全体の約一割を占めるにとどまるものである。

また、心敬の付句が他二者の付句の表現型と完全には一致しない場合は、70例にのぼることが分かる。その内訳を見ると、次の付合例、

24（ならひに過てよこそ長けれ　）
〵夏秋に此後いまハ独寝て　周
〵涙そふ寝覚の時雨心せよ　侍
旅ねにや老の歎もおもるらん　心

の、周阿の説明型、救済の表明型、心敬の主観描写型のように、全く表現型が異なる付合例は、45例を占めることが指摘出来る。

残りの25例は、救済か周阿の少なくとも一人と基本型は一致するものの、複合型として基本型に付随する表現

型で相違する場合である。このような場合のうち、

35（雪に分いる小野の通路　　）

へすミがまの烟を山の中にミて　　周

へ冬ぎくのかれし比より里ふりて　　侍

鹿の音も色なる月によハ更て　　心

の例の、心敬句が主観描写―説明型で他句は説明型のように、他者の付句が純粋型で心敬付句が複合型である付合が19例と多数を占め、うち2例は心敬句が例句のように、他二者と基本型で一致する。

逆に、心敬句と共通する基本型を持つ、救済・周阿いずれかの付句が複合型であって、心敬句が純粋型である場合はどうであろう。

次例、

45（涙のしらぬ夕ぐれもなし　　）

待初し心こそ猶くやしけれ　　侍

月待と人にミえてハいふものを　　周

忍ぶるをもらす心よたれならん　　心

の、心敬句が抒情型であって、周阿句が説明―抒情型と見られるような場合は、6例にとどまるのである。

これらの事実から、心敬は付句するに際して、可能な限り救済・周阿の表現型とは異なる表現を試みている。また他者の表現型と共通性のある表現型を採る場合では、その単純さを微妙な表現に洗練させる方向を選択している場合が多い。しかしながら、逆に前二者の表現が複雑さを持つのに対して、大様な表現を提起している場合も認められるという結論に至るのである。

㈣　心敬の独自表現型句の特徴

以上の検討によって、心敬付句の表現傾向は概括的に明らかになったが、さらに心敬の付句における表現の力

点を確かめるために、心敬が独自の表現型を採る句について、その傾向を分析すると表Ⅲのようになる。

表Ⅲ

	該当句番号	計
主観描写型	2 18 24 30 54	9
	61 64 88 95	6
	5 21 27 47 50	15
	((83))	
客観描写型	37 (94)	2
	6 9 13 15 17	13
	44 68 74 80 81	15
	84 87 98	
説明型	25 32 (36) 38 (48)	14
	49 56 58 67 71	21
	78 86 96 (97)	35
	((3)) ((8)) ((11)) ((19)) ((31))	
	((35)) ((39)) ((41)) ((42)) ((46))	
	52 ((53)) ((59)) ((62)) ((63)	
	65 ((72)) ((73)) 77 ((85))	
	92	
表明型	20	1
		0
		1
抒情型	28 (45)	2
	((51)) 66	2
		4

（注）該当句番号の上欄は純粋型、下欄は複合型を示し、計の数値は、上段　純粋型、中段　複合型、下段　合計の句数を示す。

表から、表明型と抒情型は心敬の全句が独自句である。客観描写型は全句に占める同型比より、わずかに独自句の場合は比率が高く、純粋型は2句すべて独自句であることが分かる。主観描写型も同傾向を示すが、こちらは全句における比率に較べて、複合型が多くなっている。説明型は全体の56句のうち独自句は35句を占めるが、独自句ではこの表現型は減少している。ところがその複合型は21句全句がそのまま独自句であり、[注八] 逆に純粋型は全体で35句にのぼるものが、独自句では14句と激減している。結局、説明型の複合型が独自句では比率の上で増

加しているが、それら独自句のほとんどが他作者のいずれかの純粋型の表現型と基本型を同じくしているわけである。

これらの事実から、心敬が付句の創作において他作者に対して、特に独自の表現を採ることを意識した場合、説明型において付句の大様さを否定して、複雑な表現の付句を志向したことが指摘される。このような付合例としては、すでに引用した8の付句（一五頁）をあげることが出来る。また他者の表現型と異なる表明型や抒情型を採ることによって自句を強調したことも、

28（うちもねられず夜こそ長けれ　　）
　在明の月に砧の声聞て　　周
　ヘ暁のかねの名残をしたひしに　　侍
　身は老ぬはかなや何を思ふらん　　心

の例句に窺えるのである。なお、主観描写型と客観描写型において独自の表現を採る場合には、いずれかといえば、前者の場合は精緻な表現を提起し、後者においては直截な表現を主張する意識が働いたと解してよいかと思われる。

このように心敬の付句を検討して見れば、『連歌合』は心敬が相当に意図的な立場に立って付句した、創造的作品であったことが歴然とする。従って心敬にとって、前句がいかに古様な発想と表現を持つものであっても、『連歌合』の時点では、相手との関係でその改変は不可能であり、付句が困難である、という事情とともに、創作態度の観点からして、一層非難に値するものと映じたのであろう。心敬が跋文で前句を非難したことは当然であったといえよう。しかしながら、心敬の付句の検討を通じて明らかにされた真の表現上の問題は、心敬付句が救済・周阿のそれに対してきわめて強い独自性を提示することの背後に、上古連歌の欠点と認められる表現を、心敬の創作的営為のなかで無言のうちに批評している事実であったと解される。

有伯への書簡と跋文の対比から、救済・周阿の付合作品である救済と周阿の百番連歌合が、関東の連衆の間に珍重される雰囲気が存在した事情が推測された。とすれば心敬の付句創作はそのまま、地方連歌としての関東に

おける連歌享受の現状に対する、暗黙の批判であり得たといえよう。その事情の一端は、心敬が後に『自注』に筆を執るに至って、前引の（九頁）62の前句について、「前句、殊外難儀におぼえ侍る歟、かやうの前句には、用心なき好士ハ、筆の下に何とも付侍れば、付句あり。（下略）」と指摘するなど、しばしば前句批判とともに付句態度へ言及していることにも証されるであろう。

(五) 心敬句の付様の傾向

『連歌合』の付句の検討も長くなったが、その最後として、心敬句の付様がどのような傾向を示すかについて検討することにしたい。

心敬の付合を救済・周阿のそれと比較して、最も顕著であると認められる相違点について分類を試み、それを表示すると、表Ⅳのようになる。

表Ⅳ

救済周阿句に対し	該当句番号	計
題材 別材を選択	5 6 14 17 21 46 47 54 58 59 63 64 67 68 73 76 85 94	18
題材 特異な選択	12 15 19 20 24 31 43 96	8
付様 細かな付様	1 3 4 8 16 18 22 26 28 29 30 40 45 52 65 66 72 74 75 77 78 82 84 86 93	25
付様 大様な付様	27 32 33 34 36 37 44 50 53 57 80 87 95 97	14
付様 差異ある付	2 9 10 11 13 23 25 35 38 39 41 42 48 49 51 55 56 60 61 62 69 70 71 79 81 83 88 89 90 91 92 93	32

ここでは題材の選択と付様の程度という、二つの観点を併用した包括的な分類を試みたが、これによっても大体の傾向は察せられるであろう。[注九] 題材の選択については、心敬が救済・周阿と別の題材を選択する、

19（露やなミだのたぐひなるらん　　）
　うきは只荻ふく風の夕にて　　周
　身にしれバ虫の鳴ねも哀にて　　侍
　思ひ草胸に色付野にかれて　　心

のような付句が19例存在する。

また、題材選択の特異さが印象づけられる、

43（身にハしらるゝ人の面影　　）
　わかれにしその日ハ今も遠からで　侍
　夢に行我ハそなたによもミえじ　周
　たらちねに心の似ぬを恨にて　心

のような付句も8例を指摘出来る。

また、題材選択における顕著さよりも、付合の性格のうえで、救済・周阿の付句との間に差異が認められる場合として、

78（なれても山の奥ぞ寂しき　　）
　柴の戸をたゝく夕の松の風　　周
　すつる身に成て住やバ柴の庵　　侍
　松風に心ゆるせバ袖ぬれて　　心

の例のように、他句よりも細やかな付様と認められるものが24例にのぼる。

逆に、

27（涙になるも月をこそ見れ　　）

〈秋更て露だにミえず小夜時雨　侍
〈故郷の荻ふく風にさよ更て　周
秋きてハ思ひ捨べき暮もなし　心

の付句のように、大様な付様と判断されるものは14例にとどまる。

さらに、前引（七頁）の、

92（夢より後に夜こそ明ぬれ　）
鳥も鳴鐘も声して又もねず　周
きのふぞと思ふ別も昔にて　侍
送り捨帰る野もせに鐘なりて　心

の場合のように、他者の付句に比較して、発想をも含めて付様に飛躍が感じられる付合は、32例と三割にのぼり、最多数を占めることが注意される。

以上の事実から、心敬は題材の選択においても、救済・周阿との共通性を避けようとする意図が強いことが窺われる。また、付様においては飛躍した付様や大様な付句をもって、両者に対する自己主張をなしていることが察せられた。しかしながら、心敬は細やかな味わいの付様を示す句作を捨てているわけではなく、その場合も相手句に対して自句の特徴を対置する意図によるものであった。この両様の事実は、そのまま救済・周阿の付句においては前句に細かに密接した付様が多く、大様な付様や発想の広がりや深さを伴った付様は乏しい、という事実を意味するものであった。心敬のこのような付句態度は、上古風の長所は生かし、短所は改めようとする意識的なものであり、それはそのまま現代の句風に対する態度でもあったと解してよかろう。その間の消息を心敬は跋文に、「用捨肝要」と断定的に述べたのである。

三、ひとりごとにおける諸問題

(一)　『連歌合』跋文から『ひとりごと』へ

心敬の連歌合という作品形式への関心が、はやく在京時代から存在したことは、斉藤氏の指摘されたところである。連歌合は心敬にとって、表現手法の問題であるとともに、表現態度をも問題とする、高度な批評の実践の場にほかならなかった。したがって救済と周阿の百番連歌合にも、時代が遡る作品とはいえ、いなそのような作品であるからこそ、激しい批評的関心を抱いたのであった。有伯への書簡を一読したのみでは、この連歌合に寄せる関心は、連歌史や創作態度への問題意識に従属するもののごとくに印象されるのであるが、いまはそれを逆転させて理解することも出来る。心敬の書簡は、救済・周阿の付合を眼目として、一方ではより肯定的方向に、また他方はより否定的見地へと、その表現に改変を加えるまでの厳しさでなされた批評であったのである。

心敬は関東に下向して、再びその百番連歌合に接する機会を持った。そのときそれは確固とした権威を帯びてその地に伝存し、救済・周阿も侵し難い声価を担って存在した。またその連衆の連歌享受は、創作態度を問題にし得る雰囲気のものではなかったと想像してよい。そこに心敬が救済・周阿に対抗する自らの創作活動として、難点の少なくないその前句に、あえて付句を試みるという営為が必要となったといえるであろう。『連歌合』跋文は、その創作目的を「田舎の徒然の心を養ひ、又、いさゝかの稽古にもと思ひ侍るばかり也」とするけれども、「徒然」といい「稽古」とする表現には、心敬の内部深くに寵められた情念が託されてあったと見るべきであろう。少なくとも心敬は、自らの作品が正当に理解されることは期待し得ないという、一つの覚悟をその奥に秘めてこの創作を生きたといえるのではなかろうか。心敬の連歌文芸への求道を考えるとするならば、関東の地におけるまさにそのような心敬の、内部と外部にわたる状況のなかにおいてでしかないと思われる。このような心敬像に想到するとき、『連歌合』とりわけその跋文と対比されるべき内容を持つ作品として、『ひとりごと』が存在することに気づかされるのである。

二　『ひとりごと』にみる連歌合への関心と連歌史記述

そこで以下に『ひとりごと』の検討に入るが、検討の一貫性を保つためにも、また心敬像により一層の鮮明さを与えるためにも、さきに『心敬有伯へ返事』から得られた問題検討の観点を生かすことにしたい。

『ひとりごと』においても第一に問題となるのは、救済と周阿の百番連歌合への関心、ひいては自己の連歌創作の事実との関係である。前者について『ひとりごと』は一言もふれるところがなく、心敬はその存在に口を閉ざしたと判断せざるを得ない。心敬は付合論で、古人の秀逸として諸人が書き置いたものを見ても、大体前句を書かず、また語り合うのを聞いても、前句の沙汰がないとして、連歌はいかほど玄妙な句でも、前句を聞かないではどう仕様もないと述べている。この主張からすれば、百番連歌合に言及しないことは信じられない態度である。また、周阿の付句について既知の例句を示し、その句が世間で秀逸として認められているが、心麗しく前句に寄っていないと批判して、『新古今集』の良経歌をもとにその点を説明する。それがきわめて詳細かつ具体的であることからしても、心敬の救済・周阿の百番連歌合への無関心さは、まことに不審である。

このような事実から推測されるのは、『ひとりごと』の付嗩相手は、心敬が救済・周阿の百番連歌合を披見した事実を熟知するか、全くそれと逆の立場にあることである。この時点で、心敬がいまだその連歌合を披見していないという想定は、すでに述べたところから必要ないと思われる。そこで前二者の場合について考えると、相手が熟知しているならば重複した論述を避けたことも考えられはするが、言及がないのはやはり不自然であろう。心敬は救済と周阿の句風について、『ひとりごと』の用例と批評で十分であると判断するとともに、その目的のために両者の連歌合を具体的に引用することを、何らかの配慮からさしひかえた、と見るのが最も妥当であると思われる。

第二に問題となるのは、心敬が『ひとりごと』において、連歌史の展開と創作態度の変化を、どのように表現しているかという問題である。これらの点についてこの作品は、連歌は万葉より始まって代々の集に入集し、後鳥羽院の比から盛んになったとして、百韻・五十韻・千句への展開を述べる。次いで善阿の門弟の地下連歌師をあげ、そのうちの救済を特筆して二条良基や周阿らその門流を跡づける。さらに応永年中からの著名な作者を列挙し、なかで梵灯庵主を高く評価する。そして最後に、近世までの好士として真下満広以下を指摘し、宗砌・智蘊を堪能と評価しているのである。

これらの事実から指摘出来るのは、連歌史の記述は具体的に作者名をあげ、それぞれに評価を加えるという詳

細なものとなっていることである。それにもかかわらず、連歌史が創作態度の変化の問題と直接に結びつけた形では言及されていない事実は、注意されてよい。『ひとりごと』の構成は、『心敬有伯へ返事』に比して複雑なものとなっていて、創作態度の問題も相手への話主の態度の表現に浸透した形で展開されているとはいえ、この点は特徴的であるといえよう。この特徴は、『ひとりごと』が、応永の比、永享年中に諸道の名匠がことごとく失せ果ててしまったという、永享期以前と以後との対比的な歴史評価をこの作品の要素として、基本構造を形成させている事情に関わるものであろう。[注二〇]

㈢『ひとりごと』における救済・周阿句への態度

第三に問題として採り上げるべきは、心敬が救済・周阿の句を引用するに際して、どのような態度をとっているかという問題である。心敬は『ひとりごと』において、まず周阿句、

海士人の浜田かりしほみちぬるに
腰にさすか（た）なびきなる花すすき
雲あれば出る山にも月入て

次いで救済句、

ふる郷に跡をつぎ木の花咲て
こしにさすかたなの文字を取分て
いつ出て雲まの月に成ぬらん

と、それぞれ三句ずつ前句を省略した形で引用する。それらはあたかも『心敬有伯へ返事』の引例に対応させる意図でもあるかのように、両者への心敬の評価に応わしい表現を備えていて、それらがはたして両者の実作であるかを疑わせるほどの適例となっているのである。

さらに周阿については、

柴の戸ぼそをたく秋風　と云に、

今夜とは契らぬ人の月に来て

の付合例を紹介して、それが麗しく前句に寄らぬことを、良経歌「月みばといひしばかりの人はこで槇の戸たたく庭の松かぜ」の上下句の即応の美事さと比較して非難する。これに対応させて救済についても、二条良基の発句への救済脇句、

冬さく梅にまじるくれ竹

のみを示して、草木に竹が寄合となることを『古今集』の「木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしにもわれは成にけるかな」によって証し、それが本歌であるならば草木の心を表現したいところであるが、諸人は竹を寄合として付けるのみである、と嘆じていることが注意される。

以上に見てきたところから指摘出来るのは、周阿句は、気が利いて、配合の技巧に熟達しているが、深い感情やたけ・品・面影などの、ようおんの句は見えないと厳しく批判している事実である。それに対して救済は、哀れ深く、不便の体であるとの先達評とともに、品・たけ・艶の句など、多様に認められると高く評価する。それを受けて、古人の強力体・写古体という、巧みで鋭い表現の句も、近代のように華美で真実味に欠けることはない、とする一文が置かれている。これも、救済句の多様さの指摘を受けての言として、直接的には救済の句について評したものと解してよかろう。

そこでこれらの救済評価に比して、後半の救済脇句の感懐が不可解となってくるわけである。それは「諸人」とする口吻からして、救済に言寄せた近代の寄合付の批判である、と認めてよいと思われる。なぜならば、ここで心敬が良基発句[注二]、

雪の山草木の花の家ゐかな

をあわせて引用するならば、救済脇句の価値の高さは明白となると思われるにもかかわらず、脇句とその本歌のみを対照させて、単なる寄合の観点からのみ言及されているからである。

このように、心敬の救済・周阿句に対する見解を見るとき、救済・周阿の句風の区別意識は、例句の引用態度にもきわめて明瞭に示されていることになる。それとともに周阿においては、付合が内容的な深さに欠ける、と

いう欠陥を非難するのに対して、救済の場合は、その付句についての後人の理解の不足を問題とするために、引用されているのであった。これらの事実は、心敬の連歌観の核心をなす内容面で、両者の決定的な相違が示されることにほかならず、特に『連歌合』跋文における両人への態度とは、大きく異なるといえよう。

㈣　『ひとりごと』が示す享受者対応

最後に問題とするのは、心敬が『ひとりごと』においては、自らの連歌観を相手に伝えるについて、どのような態度で臨んでいるかという問題である。心敬は、はからずも関東下向後の二年間をこの地で過したことを述べたうえで、「都はるけき境なれども、いにしへの人の旧跡とて、和歌の心ざしの人・色好みなども残侍」と、この地の連衆に高い評価を下している。そしてそれらの人々と和歌や連歌などについて、自然に目立たぬ形で語り合うことが重ねられた事情を明らかにする。さらにそのなかのある人物から、「都ほとり、よろづの道、むかしにかはり果ぬる有さま、ことに歌連歌などのなり行侍ることなど」をひそかに尋ねられたのに答えるという姿勢で、自らの見解を展開するのである。

したがって『ひとりごと』においては、永享期を境とする文芸壇の変化の指摘を別にしても、各所に創作態度の問題が繰り返し提起される。それらは師友の不在による十方常暗黒の嘆き、観想と深く関係する水と月との様態美の描写、道林禅師と白楽天の対話に拠る常住有所得の否定、付句における捨身の賞揚とえり句のみを求めることの無念さ、耳心のとどく好士の大切さと修行おろそかで劫のみ入った人物の理解力の欠除、和歌の学びによる幽玄・余情の体得と和歌になお用捨あることの注意、特に「かたつ田舎などに、此比、賦物をとるさま不審に侍り。発句を読進して已後、賦物の沙汰侍りて定給へること、おぼつかなし。(中略)又、かたはらの会などに、座上の好士などの、世を名の世・ただ世など云ひならはし侍る、聞きにくく候哉」とする、田舎の好士の賦物や句数についての放恣な態度の批判という、全体的・体系的な内容を持つものとなっているのである。

実にそれらはほぼすべて、『心敬有伯へ返事』に述べられたところであった。しかも『ひとりごと』においては作品の構成要素として、巧みに、またかなりに一般性を持った形で配置されている。しかしながら、それらが

永享期以降の連歌の好士の創作態度の批判や否定にほかならないことからすれば、きわめて現実的な意味を持つものであることが注意されるのである。このような連歌享受の状況への批判的態度は、『連歌合』の跋文には全く見出し得ないものであった。このようにして、さきに心敬有伯へ返事と『連歌合』跋文の比較を通して、心敬が在京中に認めた書簡の相手への態度と、関東流浪後の連歌愛好者への対応との変化として指摘したことは、必らずしも正確ではなかったことになる。問題は厳密には、関東における心敬の諸作品間の、想定される享受者への心敬の対応意識の差異の問題として考えなければならないのであった。そのことは、さきに跋文の検討を終えたところで指摘した、関東流浪が与えた創作意欲の覚醒という、心敬の内部に関わる問題についても、あらためて詳細に検討することの必要を示唆するであろう。

㈤　『ひとりごと』の性格と連歌合無視の問題

さてそれらの検討にあたっては、かつて『心敬有伯へ返事』を採り上げる前提として、この書簡の性格と救済と周阿の百番連歌合との出合いの経緯を明確化したのと同様の手順をふむべきであろう。つまりここでも『ひとりごと』という作品の性格と、救済・周阿の連歌合への関心の有無という問題について、すでに四点にわたって指摘した諸点をふまえて考察することが求められるのである。そして最後に、『ひとりごと』における『連歌合』との関係の有無を確認するならば、そこに関東流浪の二年目を生きる心敬像が、ほぼ明確になるといってよいのではなかろうか。

まず『ひとりごと』という作品の性格であるが、それが論書であるか随筆であるか、という形態上の問題もさることながら、当初は個人の質問に促されて筆が執られるという、私的な意識に発するものであったことが注意される。特に心敬が、この地の伝統を受けて和歌・連歌に関心を寄せる人々と、「をのづから忍び〳〵」に「たがひに語らひ侍」ることがあり、そのなかの「ある人」が、「都ほとり、よろづの道、むかしにかはり果ぬる有さま、ことに歌連歌などのなり行侍」ることなどを、「ひそかに尋ね」ることが度重なったことに対して、「胸に思ふ事うちさらし侍らねば腹ふくるるなどと古人も申侍れば、草の枕のひとりごと」として、洩らしたのが

『ひとりごと』であった。この記述によって、この一篇が心敬から特定の個人への私的な語りかけ、という性格を明示しているのであり、それゆえにその内容は心敬の真意にほかならない、という執筆態度が表明されていると考えられるのである。

次に『ひとりごと』における救済・周阿の百番連歌合への関心の問題に移ると、この作品は奥書から応仁二年四月三十日に第一稿が成り、次いで八月三十日に再写されたものと推定されて、それぞれ『連歌合』の二か月前と『百句付』の一か月前の時点に当ることが判明する。心敬の創作意欲が『連歌合』、そして『連歌百句付』という方向でも結実しようとしている時点であってみれば、それらの創作意欲を触発した救済と周阿の連歌合について『ひとりごと』に何らかの言及がなされていることが当然のように考えられる。事実はすでに指摘したように、両者の連歌合は完全に黙殺されている。伊藤敬氏は、心敬の『老のくりごと』の検討のなかで、心敬が各著作間で重複を避ける著述態度を取ることを指摘された。[注二二] いま『ひとりごと』について検討すると、たしかに作品の過半の記述は他作品と重複しない、同作品に独特のものである。しかしながら、氏も採り上げられたように、それらは大むね京都の戦乱の状況や、永享期を中心とした京都文芸壇の盛況など、作品の題材面に顕著である。

心敬は『心敬有伯へ返事』においては、救済と周阿の百番連歌合を引用して自説を展開したにもかかわらず、なぜその所説と基本的に変わることのない、『ひとりごと』の救済・周阿批評の個所に、それらを引用しなかったのであろうか。伊藤氏の見解が広く妥当することも考えられるが、それよりもこの百番の連歌合を再見したとき、心敬にかつて書簡においてなしたような、両者の句形改変がはばかられる事情があった、と考えられはしないであろうか。『ひとりごと』の周阿句は、あまりにもよく心敬の主張に適合することから、あるいはそこに句形改変などの事実が存するかと臆測したが、心敬の引例はつねに、主張に適切なようになにほどの改変がなされるという推測を認めるとしたならば、改変が不可能の事情にある救済と周阿の百番連歌合からの引用を避けたという推定も、全面的に否定出来まい。しかしながら、このような事情とあわせて可能性が存するのは、すでに問題検討の第二点で推測したように、この連歌合の所持者への、心敬の態度のしからしむるところという解釈である。つまりそこで指摘したように、救済への賞讃と周阿への厳しい批判は、この所持者やそれをとりまく連衆に

対して好ましくない反響を生む、という心敬の判断が働いたという理解である。

『ひとりごと』が私的な性格を持ち、その内容は心敬の本心を述べるものであった、とするさきに述べた見解からすれば、この矛盾する理解はなお不可とすべきものであろう。両者の連歌合の直接的な引用を避ける程度の配慮は、いかに私的な見解を吐露する作品とはいえ、必要であったとはいえそうであるが、なおこの理解も十全でないとするならば、つまりはたとえ『ひとりごと』であっても、心敬の本心がすべて語り尽される必要はない、という消極的な論理を提出するほかないであろうか。これらの微妙な問題点をも解明するために、本稿の最後に、『ひとりごと』と『連歌合』との関連の実際について確認することにしたい。

(六)　『ひとりごと』と『連歌合』と

すでに予測されたことであるが、心敬は救済・周阿の百番連歌合についてと同様に、それらに自らの付句を加えた『連歌合』についても、一言も言及していない。それのみならず、連歌における相互批判の必要性についてさえ、全く言及することがない。この事実からすれば、心敬の『ひとりごと』の述作と『連歌合』の創作とは、完全に創作主体の分裂した心敬像を示すもの、というべきなのであろうか。そして前者により多く心敬の真実が伝えられているとすれば、心敬は句作による批評という、批評としても本質的な行為を放棄したと見るべきなのであろうか。『連歌合』を再写するに際して宗浣禅門にあてた跋文に記すように、心敬にとってこの作品は、高位の人物からの要請によって他律的になされた、創作以前の単なる義務に過ぎなかったのであろうか。それは一面の真実であるようにも見えるが、すでに種々の観点から加えた分析の結果は、この作品の依頼者の理解力は別として、『連歌合』付句は批評以上に批評的である、正当な創作的営為の果実であることは疑いえないのである。

このように考えるならば、『連歌合』へと展開する批評的な内容を持った主張を、『ひとりごと』のうちにも発見しなければ、逆にこの作品の創作的価値を否定することになろう。『ひとりごと』における批判の直截な表明が、一つにはその『連歌合』跋文において心敬が黙止した、救済と周阿の作品批評であったことはいうまでも

ない。特に周阿については、例歌までも示してその付様の批判を行なっていることが、両者による百番連歌合への、心敬の関心を推測させるといえるのではなかろうか。心敬は『心敬有伯へ返事』においては、救済・周阿を対比的にとらえながら、なおかつ両者は近代作者とは一線を画する作者、とする見地に立っていた。ところが、『ひとりごと』にあっては、そのような判断は窺うことが出来ず、「堪能の次の句」と「不堪の最上の秀逸」[注一三]の間の厳然たる区別を説くところが、ただちに救済・周阿の評価に続けられている事実が注意されるのである。心敬は『ひとりごと』において、救済と周阿に決定的な差のあることを、真意として示していると解してよいであろう。

このような両者を区別した認識が、創作主体の問題に連続していることも注意されてよいであろう。それらとの関連をも含めて、『ひとりごと』という私的な作品にあっては、救済・周阿の評価は、かつてよりいっそう厳しくなされているのであって、とりわけ『連歌合』跋文の記述との相違は、決定的なものがあるのである。『連歌合』跋文に見られる救済・周阿を一括した高い評価は、前句への非難と現代句風を承認する見解とともに、両者の百番連歌合の所持者にしてかつ心敬への付句の下命者である人物、の存在を想定せずにはとうてい理解出来ないものであろう。

現代句風の問題は、そのまま創作主体の問題にほかならない。『連歌合』の跋文が、救済・周阿を包括して評価することとあわせて、現代句風を承認していることは、心敬が創作主体の問題に言及することを注意深く避けることによって、当代連衆批判を展開することなく筆を納めていることにほかならない。ところが『ひとりごと』においては、美意識論・付合論などを通じて、全てが創作主体論に統合され、明白に連衆批判となっているのであった。特にそのなかに式目論が加えられていることが注目されたが、その内容が一つに「満座ほしきまま(まだめ)に定侍る」、つまり連衆全体を捲き込んだ賦物の恣意的処置への批判であり、二つに「座上の好士などの、世を名の世・ただ世など云ひならはし侍る」という、座功のみの作者による句数制限の拡大解釈への不快感の表明であることは興味深い。それはことさらに、「かたつ田舎など」の「此比」の、「かたはらの会など」の「座上の好士」と明言された批判であったのである。

ここに至って、『連歌合』が相手に対する配慮によって、跋文の記述に語られるべきを黙し、それゆえにその語られざるものは心敬の付句自体に籠められている、という特質を持つことも、いっそう明白になったと考える。つまりは、『ひとりごと』の特に明確な表現は、『連歌合』の心敬付句そのものに呼応し、相互に補完するようにして、心敬の内部の真実を顕示しているのであり、両作品に相互に語られなかったところもまた、その真実を浮かび上がらせるための影となっているのであった。すでに『連歌合』の付句そのものの検討を終えた段階で総括した心敬像は、『ひとりごと』というもう一つの作品を介することによって、いっそう画然としたものとなったといえよう。

注

注一　以下の三作品の本文は、『救済周阿心敬百番連歌合』は、静嘉堂文庫蔵『救済周阿心敬連歌合』（連歌集書四六、所収）、『連歌百句付』は、天理図書館綿屋文庫蔵『心敬百句付』（横山重氏編『心敬作品集』、角川書店、昭和四七年三月、所収）、『連歌百句付自注』は、彰考館文庫蔵『心敬連歌自注』（横山重氏編前掲書、所収）および大阪天満宮文庫蔵『百番連歌合』（斎藤義光氏「〈飜刻〉心敬「連歌百句付自註」補遺」（『言語と文芸』九四、昭和五八年七月）所収）によった。また各前句上欄に、百句の通し番号を私に付した。

注二　斎藤義光氏に、注一の論文のほか、「晩年の心敬連歌（上）」（『女子大国文』第九十号、昭和五六年一二月）、「晩年の心敬連歌（後）」（『女子大国文』第九十一号、昭和五七年七月）がある。

注三　この書簡は、太宰府天満宮宮司西高辻信貞氏蔵本および大阪天満宮文庫蔵二本が知られる。本文は、島津忠夫氏『連歌史の研究』（角川書店、昭和四四年三月）所収の飜刻によった。また木藤才蔵氏『連歌論集三』（三弥井書房、昭和六〇年七月）は、詳細な解説を付して収録する。

注四　本文は、注三の木藤才蔵氏飜刻によった。ほかに島津忠夫氏『古代中世芸術論』（岩波書店、昭和四八年）の飜刻・解説がある。成立については木藤氏前掲書解説参照。

注五　注三、島津忠夫氏前掲書解説。

注六　注二、斎藤義光氏「晩年の心敬連歌（上）」参照。

注七　本文は、注一、前掲諸本参照。また斎藤義光氏「心敬「救済・周阿百番連歌合」奥書考」（『俳文芸』第二十一号、昭和五八年六月）がある。

注八　本稿は、心敬付句の独自性を明らかにすることを目的とするため、心敬付句の表現について詳しく分析を行なっている傾向がある。この数値には、多少ともこの事情が反映していることが考えられる。

注九　連歌付合の特質を詳細に把握するためには、伝統的な付合諸分類とあわせて、小西甚一氏『宗祇』（筑摩書房、昭和四六年一二月）所収の『水無瀬三吟』の注釈に示される、文・地、重・軽、親・疎といった観点による分析が必要であろう。

注一〇　拙稿「心敬における詩と散文――その晩年についての一視点として」（『文学の根拠』、冬樹社、昭和五三年二月）参照。

注一一　注四、島津忠夫氏、木藤才蔵氏前掲書参照。

注一二　伊藤敬氏「心敬『老のくりごと』私注」（『藤女子大学国文学雑誌』12、昭和四七年一〇月）参照。

注一三　注四、島津忠夫氏前掲書参照。

〔付記〕　本稿を成すにあたって、国文学研究資料館棚町知弥教授の御配慮にあずかることが多かった。わけても太宰府天満宮宮司西高辻信貞氏蔵本の拝見については、仲介の労を悉けなくした。末尾になったが、貴重な蔵書の閲覧を許し下さった西高辻信貞氏および太宰府天満宮文庫、また大阪天満宮文庫に御礼申し上げる。